

紅い花 (七) 赤い月の光

琉 紅

(七) 赤い月の光

「もう、私の後ろに二頭も中山の騎士が付いてきた。町の人は『何事か』と振り向くし、恥ずかしかったのよ」

水平線の裏に隠れた太陽、月はそれから照らされて紅色となる。

琉球の北の山腹にそびえ立つ今帰仁城を、美しく照らしていた。

赤瓦が闇に負けずに朱色な自分の色をさらに主張している。

賢龍が太陽だとすると、美久は月なのか。

姉の事、ありがとう」

「知らん……尚巴志は信頼できない男だ。君には隠密を付けて

ある」

「やつぱり、逐一見られて聞かれていたのね。恥ずかしい」

「力とは、戦の様な暴力だけではない。知る戦争、これもそうだ」

「よくわかるわ」

美久は彼から少し離れていたが、自然と寄り添つた。

一番上の本丸と呼ばれる王の住む建物、その庭には、心の情熱で赤く燃え始めた一人がいた。

「養成所からの外出許可は、とても苦労したわ。でも全てが分かったの」

「馬を借りることができたと聞いたぞ。中山の護衛も付けて敵地であるここ来るとは。何という贅沢な家出だ。はつはつ」

「賢龍は笑う。

「何故、城壁の正面で馬から私だけを下し、わざわざ木々に隠された真っ暗な裏門まで歩かせたの……まあ、いいわ。おかげでこれからもこつそり、この城に入れるわ」

笑いを抑えながら賢龍は言つた。

裏門の番人には、お前が来るかもしぬれど、伝えてある。特別

許可だ

「うれしい」

と、美久はまるで子供のように思わず賢龍の腕にしがみついた。

しばらく二人で月を眺め、賢龍は真顔で

「あの時、君が中山の神人の血筋の為に、堂々と北連れ出すことが出来なかつた。さらに、そこにお前を残していくことが心配でもあつた。私が側にいてやればいいのだが……まあいい。さあ、これを渡そう。この前もらったやつだ」

賢龍は袖から木片の花の形、花は赤く塗られ、丸い葉のついた小さないんざしを取り出した。

「わーっ、かわいい」

「北山の金細工職人は、腕がいい。あの花以上の出来栄えであろう」

彼女は涙で目が潤む。

「ありがとうございました。とても綺麗な花……あなた様は北山の王子だと聞きました。ああ、気がつかなかった」

賢龍はそれを右手に持ち、彼女の髪に優しく押し入れた。賢龍の目を見つめた。

「私と、こんな所で会つていいい？」

「妻は……この世を去つた。病気だつた」

賢龍は、じつと下を見つめていた。

「それで、会いたくて久高島に来たのね……そこで拾つた私は、身代わり？」

「そんなことは無い！」

力強い言葉に、美久は耐えきれず目を反らし、海の見える城壁の側に歩き出した。

彼も後を追う。

「どうか私を、この花の咲いている国に連れていくて下さい」と美久は城壁の外に目をやる。

黒く広がる海原、その遙か遠くには、月に照らされた島々が薄く見える。光の道が目前の砂浜につながっている。そして最後には、紅色の花のかんざしに反射し、賢龍の目に映る。

「どこかわからないな。大和か、もしくは明国か？ それとも、もっと遠くなのか」

「探すわ」

「はは、生きている間に、その花を探せるかどうか分からんそもそもいいの。海の向こうをこの目で見たいの」

二人は本丸の庭の端に近づき、月光の破片を漂わせる海に目を移す。

海から風が吹き彼女の髪を乱しては、通り抜けていった。

彼の口元に笑みが浮ぶ。

「養成所で学ぶヌルとは、最後にはどういう仕事に就くのだ。祭り事や、あの世とのつながりの儀式なのか？ 何を学んでいる？」

美久は微笑んで首を振る。

「大したこと無いわ。私が島で既に学んだことを、遠まわしで教えているの……外の世界を知るには砂浜を見る。この世にあるすべてのものに注目するの、自然、人間、心、それだけよ。でも、男性は力で、物事を進めようとするから見えなくなるのよ。養成所では、私と他の数人にそれと戦さを結びつけたやり方を教えたんだわ。私は好きじゃないの」

「それは明国の兵法の類だ」

「だって、人を騙しては殺す勉強よ、嫌だわ。私は神人の娘よ、

人を助けるのが仕事なのよ。でも大君は、その神人やヌルをひとまとめにして、管理しようとしているの。その頂点に立とうと

「……中山との戦は避けられない。南山は崩壊寸前だ」

やがて中山主導の琉球の連合軍が、完成するわ」

「ああ、尚巴志の動きは、耳に入ってきた。」「不安だわ……もう戦^{たたか}の話はやめましょ

美久はそう言い、賢龍と共に城の中庭、門の近くを歩いた。

そこに、大きな石が一つ。
美久は興味を持った。

「この石は先代からの話によると、この城を守る神が宿っているらしい。戦で勝利を導く神かな」

「そうなの」

と、美久はあっさりとしている。

長槍を持つた兵が、彼に気が付き敬礼をする。

「私は、何？」

「もちろん、この石と変えてもいい。守護神だ」

「私を利用するの？ 戦はイヤシ」

満月の光は本丸の庭を歩く二人を照らし出した。

周りには誰もいない、声がしなければ誰一人として気がつかないほど、静かにたたずんだ。

賢龍は美久に近寄り腰に手を回し、突然口づけをした。

美久は下唇に痛みを薄く感じ、唇を微妙に離した。その時、賢龍は耳元で囁く。

秋の鈴虫がその声を聞こえなくするかのように、いたずらに大きく鳴り響く。

それらを打ち消すのか、ある言葉を聞いて、美久の顔は賢龍に向かつて力強く向いた。

踵^{きびす}を返すように、「私は、ただの……久高神人の娘よ。王妃には、なれないわ」

「もう中山には戻るな」

美久は黙り込んだ。

「そなたの為に、大和の布地に明国^{ミンコ}の模様を入れた最高の着物

を用意しておこう。交易で成り立つ國、北山王妃の証だ」「わたしは……戦にも参加するの？」

「違うと言えば嘘になる。しかし、もう既にこの地は戦の世だ。

誰とて、ここから逃げられはせん

「神人とて、力ずくな」

「そうだ、そなたは、どうしても……欲しい女だからだ」

美久の目は、動搖と恍惚が入り交じった。

「一緒に戦って、この北山の國を守ろう。我らの國だ」

美久の体の中には、これまでに経験したことの無い熱い血が流れ始めた。

秋の満月がまるで太陽のように輝き、日差しを浴びているように熱く肌を照らしていた。

美久は、彼から身を離して駆け出した。

「おい、美久？」

「捕まえて、こんなさい」

と、本丸の庭に生えた木々の隙間に隠れた。

賢龍は手探りで美久を探し始める。必死で逃げる美久。

「美久、城壁から落ちたら大変だぞ」

「そんなの分かっているわ。子供じやないのよ」

美久はぎょろぎょろと隠れる場所を探した。

賢龍は、妻を失つたこともあり、必死で彼女を捜した。

「きやー！」

と、美久は声を出し、壁の向こう名を投げ込む。

木々に当たり、伏していた鳥達が羽ばたいた。

「美久！」

と、賢龍は焦り城壁から真下の暗闇を見た。

賢龍の顔は真っ青になり、動搖が隠せない。

後ろを振り向き、誰かを呼ぼうとしたその時、

「ほつはつ、ここよ。やはり、男というのは単純なのよね」

その声の方向、賢龍は駆け寄り、美久を捕まえた。

彼女を掴むその手からの背筋の痛みは、美久が久高島で彼か

ら受けた力より、力強いものだった。
やがて二人に味方する雲達は月を隠し、ひと時の間、世の中の
ものをすべて隠した。